



競技かるたの名人に挑戦

小倉百人一首競技かるた「名人位決定戦」、日本一ならず

○医学部 4年生
岸田 諭 — Satoshi Kishida

大阪大学競技かるた会の岸田諭さんは今年1月10日、小倉百人一首競技かるたの日本一を懸けた戦いに挑んだ。永世名人の西郷直樹六段に敗れる結果となったが、小学校1年生のときに始めた競技かるたの道は、最高峰の「第55期名人位決定戦」に通じていたのだ。



●岸田 諭(きしだ さとし)
1987年兵庫県生まれ。兵庫県立篠山鳳鳴高校卒業。医学部保健学科検査技術科学専攻4年生。大阪大学競技かるた会に所属。全日本かるた協会のA級・五段。2009年1月、小倉百人一首競技かるたの日本一を競う「第55期名人位決定戦」に出場し、惜しくも敗れた。

小倉百人一首の競技かるたは、記憶力や瞬発力を最大限に発揮することが要求される知的スポーツといえる。全日本かるた協会が定めた規則に従って、自陣・敵陣にそれぞれ25枚ずつの札を3段に並べ、15分間の暗記時間後に競技を開始。目にも留まらないようなスピードで手が走り、指先から札が飛んでいく。畳の上にはない空札も含めて詠まれるので、頭脳と耳、目、指先の感覚、素早い動きを支える下半身、上半身など、自分の持っている能力をフル回転させないと勝てない。

岸田さんが競技かるたを始めたのは、小学校1年生のとき。近所に子どもたちのかるた教室があり、毎週1回、1歳上の姉と一緒にほとんど休みなしで通った。

「年に1回、100枚の札を並べて3人对3人で競う、神戸新聞社主催の

団体戦がありました。自分がちよつとでも強くなると仲間を助けられるので頑張る気になり、小学校3年から6年まで毎年、姉と一緒に出ました」

高校時代は、クラブ活動の競技かるた部で腕を磨いた。大阪大学競技かるた会は現在、男子12人、女子11人。入学してから札を覚えるような初心者が多く、高校で少しでも競技に出たいという経験者は約半数。私立大学の場合は競技かるたによる推薦入試もあり、国立大学は分が悪い。かるたを始めてからの力の伸び率と、強い者を中心に団結して勝つチーム力に勝機を見いだすしかない。

岸田さんたちはそれを実証した。大学対抗の団体戦で、トップクラスのメンバーをそろえた大学に勝つたのだ。岸田さんが主将を務めた2年のとき、力のある大学院生が二人いたこともあ

り、阪大は年に2回開催される全国域学生かるた大会団体戦のA級に初めて出場した。8月と3月に、最強を誇っていた立命館大学を連破し、準優勝を果たした。そして3年の8月と3月には、とうとう優勝の栄冠に輝いた。

「普段の練習は、基本的に試合形式です。札を払う型の練習や瞬発力を鍛えるスポーツ的なトレーニングもします。指先のちよつとした感覚で決まるし、メンタル面もすごく影響します。名人戦のようなレベルになると、ほんの一瞬の差で決まってしまう」

1月10日に大津市の近江神宮で開かれた第55期名人位決定戦の一回戦。岸田さんは4枚差で勝利。名人戦は先に3勝すれば勝ちとなる。対戦相手は既に10連覇を続けている西郷直樹六段。やはり強かった。結局、3連敗して終わったが、得たものは大きかった。

「挑戦するにあたって、いろんな方から情報をいただいたり、昨年度のテレビの録画を見たりして準備してきました。これに関しては、ある程度成果がありました。それで一回戦に勝つたのだと思います。ただ次から相手は札の取り方や送り方を変えてきました。普段はトーナメントで、連続して戦っても相手が違います。経験不足で、やっぱり見えていなかった部分がありました」

岸田さんは4月から大学院に進学することが決まっている。名人の座を見据えつつ、「競技中、体重が減っていくのが分かる」というくらいハードな対戦を積み重ねていくことになる。